イエス様との出会い

藤田　憲子



ベックさんと

私が初めて、主イエス様と出会ったのは、二〇〇九年五月のことです。以前仕事先でご一緒しました方と久しぶりにお会いすることになり、彼女の車で案内されたところが小平家庭集会でした。その日たくさんの人々がいらっしゃるのに、静かな落ち着いた雰囲気を感じました。ベック兄のメッセージをお聞きし、何人かの姉妹たちと言葉を交（かわ）しました。ここにおられる方々は、私が今まで出会ってきた人々とどこか違う！そんな印象が強く残ったことを思い出します。

そのころの私は、めずらしく平安で、特に悩みもなく、幸せだと思っていました。ただ、心に頼れる絶対的な確かなものを持ちたいと欲していました。そんな思いもあって、四国の友人二人を誘って四国八十八ヶ所をめぐる遍路旅をしてみました。一年に一回、五年間の月日がかかりました。美しい山々の景色と温かいおもてなし、三人でスタンプラリーをしているような楽しい日々でした。ですが期待した「何か」には出

会うことは、ありませんでした。

最初に記した姉妹と出会ったのは、そんなときでした。そのときは彼女がクリスチャンであることも、集会に集っておられることもまったく知らなかったのです。その後「光よあれ」、「主は生きておられる」等々、次々送ってくださり、最初は好奇心から、そのうち毎日夢中で読み、集会にも少しずつ集い始めたのです。なぜか新鮮で清々（すがすが）しい感動を覚えました。そんなとき私に主が働かれたのです。もともと心臓に持病がありステントが三ヶ所入っていて、狭心症で常備薬にニトロを持っている状況の中、このときは「心房細動」で二十日間の入院をしました。

かなりハードな検査のときに「イエス様、私がこの検査に耐えられるよう助けてください。私の手をにぎっていてください」とはじめてお祈りをしました。すると、気持ちが安らぎ、いつの間にか眠っていたのです。それからは、入院のたび、また手術のたびに、「私の手をしっかりにぎっていてください」とお祈りをしています。

その後二〇二年七月、まだまだイエス様を信じる信仰について、よく理解もできていませんでしたが、この神様の教えを信じようと決心して、二人の子供たちにも話をし、御代田の福音センターで受洗しました。

息子が小学校一年生のときのことです。ある日友人たちと遊んで夕方帰ってくるなり、「ただいま！お母さん。今日からボクは、神の子になったからね」とニコニコして言いました。私は「なに言ってんの。あなたは、お母さんの子だからね。神様の子なんかじゃないのよ」と言ったのです。大事な私の子供ですから神様にさしあげるわけにはいかないのです。

そのときは何の疑問もなくそんなふうに思っていました。洗礼の日、この息子が家族三人で付き添ってくれました。遠い昔に神様の子と言ったことを思い出しました。彼らは、御代田には何回か行き、夏休みにはまた行ってみようかな？と話題になります。

二〇一五年夏には、私も一緒に四人で御代田喜びの集いに参加しました。何人かの兄弟姉妹たちとお交(まじ)わりにあずかりました。

私もいつの間にか主と出会って七年になりました。それでも信仰の歩みのおそい不信仰な者です。そんな私でさえも主のあわれみによって、イエス様のみもとで集会に集わせていただき本当に感謝です。そして主は今、「藤田の心と思いが主に向けられますようにに。礼拝、賛美したいという思いに満たされますように。たえず主が導いてくださいますように」と祈ってくださる姉妹をそばに置いてくださり、私を励ましていてくれます。感謝の思いでいっぱいです。

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

(1ペテロ　5・7)

あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。

(マタイ　6・34)

ところが順調だったはずの二〇一四年十二月二十四日、クリスマス・イブに突然呼吸困難になり救急搬送されました。ここから坂道を転がるように翌年四月の肺癌手術へと至りました。

手術前検査の朝、「日々の光」を開きました。

主にあってしっかりと立ってください。(ピリピ　4・1)

主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。

(詩篇　121・7)

まるで私のためのみことばでした。このみことばに、私はこれから起こることすべてを主にゆだねようと決めました。次々と検査をし、手術日が決められ、肺

の左半分を切除することも決まりました。とても忙しくて心配しているひまもないような日々でした。このとき病気について、何の心配も恐れもなくむしろ一番感じたことは、これが私であってよかった。子供たちや孫たちでもなく、また妹でもなかったことに安堵(あんど)しました。神様に感謝でした。

その後、術後肺炎で苦しんだり、検査のための細胞が取れず三回も気管支鏡検査を受けたりしました。三度目のときでした。のどに麻酔がかけられ、ボーっとして検査台にのぼり、「イエス様、私の手をにぎっていてください。検査が無事に終わりますようにお守りください」と、いつものように祈りました。ふと気がついたとき、本当に私の手をしっかりとにぎり、やさしくなでている手がありました。あたたかく、やわらかい手のぬくもりでした。また意識がうすれていきましたが、とても平安な気分でした。今でも時々ふと左手にあの手の感覚がよみがえることがあります。主治医の先生の手でしたが、あれはイエス様のやさしいおはからいであったと信じています。今は、抗癌剤治療をしておりますが、ときに厳しさに負けそうになるときもあります。でも、主は、「あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。」(1コリント　10・13)とおっしゃっています。だから負けずに、この病気と共に歩いて行きます。ですが私は一人ではありません。イエス様が一緒にいてくださいます。私自身は弱く、すぐに思い煩う者です。主がお導きくださいますようにお祈りしてまいりたいと思います。

藤田　憲子(ふじた　のりこ)
愛媛県立西條高等学校　卒業
フィリップス エレクトロニクス ジャパン、東京外国語学院などで勤務
家族　長女／宇野　真白(うの　ましろ)
　　長男／藤田　敬士(ふじた　けいじ)

10人の証し

Unser HERR lebt

主がくださる鞭と杖

浜崎　伸夫



左から伸夫さん、ベックさん、妻の祐子さん

私が四十五歳になった時、突然、神様は私の心の扉を叩かれました。神の存在をハッキリと感じた時でした。それは、私が二十一年間勤めた会社への退職届を撤回するか、それとも「イエス・キリストが介入していると思われる道に進む」か、の選択を求められたことでした。

それまでの私は、外資系のコンピュータ会社で働く仕事人間でした。若くして高い給与とマネージャ職を与えられ、会社の新しい戦略や事業づくり、新市場の立ち上げなどを任されました。誰もやったことがないことにチャレンジできる仕事を、やりがいと達成感を持って取り組んでいました。そのような時に、「日本の国を元気にするために一緒にやらないか」と知人でもある新しいベンチャー企業の社長から誘いを受けました。その当時、アメリカに負けないベンチャーを創出しようという試みが内閣を支えるブレーンたちから堤起され、そこに私も一員として声をかけられたわけです。私は退職願いを出したのですが、三か月間誰にもそのことを話してはならないという条件で受理されました。しかし、ちょうど三か月目となる数日前に、以前から交流があった知人から「このベンチャーでトラブルが起こっているので今は転職しない方が良い」と知らせられました。私は退職願いを撤回するか、それとも辞めて新たな道を探るかの岐路に立たされたのです。

当時、まだ信仰の確信のなかった私は「どうしてこんな時期に、このようなことが起こるのか、何のために?」と思いましたが、それと同時に直感的に「これは、イエス・キリストが私に介入したためではないか」と感じました。それまで集会の人たちとの交わりも避けていたのですが、この突然の大きな出来事に「ようし、イエス・キリストに付き合ってみよう」と、退職する道を選びました。こうしてまったく想像もしてなかった不透明な世界へと歩き始めることになったのです。中学生を筆頭とする四人の子供がいたにもかかわらず、まったく先が見えない道へと歩いて行くことを選ぶ、無謀な人生の選択となりました。不安と希望を持ちながら新しい道を検討し、同僚と会社を起こすことになりました。妻は「いいよ」と答えてくれましたが、中二の長男からは「大変だよね、自分がもし大学に行けなくなったとしても、妹二人と弟は大学に行かせてね」と言われました。

しかし、起こした会社は数年で危機を迎え、その同じ時期に私の母が危篤状態となり、経験したことがない苦しみを受けることになりました。誰に相談することもできず、会社を解散するかどうかの切羽詰まった苦難の中に置かれ、そのような中、危篤状態である病院のベッド上の母の顔を見ている時に、母が昔好きだった聖書のみことばが、湧き上がってきて私の進む道を示してくれました。

またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。

それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

（ローマ　5・2〜5）

このみことばは私にとって大きな慰めと支えとなり、主は私を信仰の入り口にハッキリと立たせてくださったのです。私は、母が天に召された翌月に洗礼を受け、仕事と家庭、そして信仰の道が一体となった歩みが始まったのです。それは以前と異なり、信仰を持ちながら「見えない世界へ進む道（主の導かれる道はどこなのか、それが仕事や生活にどう繋がり、信仰との関連性がどこにあるのか解りませんでしたが、ただ信じて進む道）」へと一歩一歩、歩み始めるものでした。そして仕事も少し落ち着いた状態になりました。

そのような時、某大学と新しい分野での研究開発を行なっていた私たちは、国の施策を使って事業を沖縄から全国に発信するのが望ましいのでは、と誘いを受け、会社の本社機能を沖縄に移し、月の半分は沖縄、残り半分を東京という生活を始めました。

それから四年が経った時、仕事上の成功の道が見え始めていました。県庁と一緒に国のプロジェクトを獲得し、「さあこれからだ」としていた時に、まったく予期せぬことが起こったのです。そのプロジェクトのプランの骨格を立てた私、つまり私の会社が突然外されるという思いもかけないものでした。予想だにしていなかった大きな危機を迎えることになったのです。私は、「なぜ?」という気持ちと、「これまでの主の恵みはいったい何だったのだろうか」、「私は主の導きの中にいたつもりだったのに、この五年の意味はなんだったのか」と苦しみと迷いの中に突き落とされました。しかし「これには、主のみこころがあるはずだ」という気持ちでいっぱいになり、沖縄のアパートの中で「神様助けてください！私はどうしたらいいのですか?あなたのみこころは何ですか」と毎晩一人部屋の中で叫びながら泣く日が続きました。人に裏切られ、希望をなくし、新しい市場を創る意欲を失い、会社を運営していく自信も持てず、自分が無力であることを知り、心も会社もどん底に落ちてしまいました。私にとって、まるで夢遊病のようにさ迷う日々が一か月続きました。

そして、十月七日の日曜日の東京での朝でした。布団の中で目が覚めたその瞬間に、「ただ、主のみこころが働いたのだ」と突然私の中に小さな明かりが灯りました。無気力な私は、「私は理解できないが、主のみこころが計画として行われただけなのだ、誰の責任でもなく主はこれらのことを起こし、私にメッセージを送られているのだ」という思いが与えられました。そして「主は私を呼ばれている、主は私のことを心配してくださっている」と強く感じました。そして、悔い改めよと。

その日の日曜礼拝の中で次のみことばが飛び込んできました。

人は心に計画を持つ。主はその舌に答えを下さる。
人は自分の行ないがことごとく純粋だと思う。しかし主は人のたましいの値うちをはかられる。

（箴言　16・1〜2）

「主のみこころはこれだ。主の計画は、このことを私に悟らせることだったのだ」と思うことができたのです。主を信じる道に入ってから五年が経ち、その間、主を慕い求めて日々歩いていたように思っていたので

すが、まさに時にかなった時に、主は私をぺっちゃんこにする出来事を起こし、私をさらに新たな信仰へと導かれようとしてくださっているのだと心の奥底から思うことができました。「私にもっと近づきなさい」と主が呼ばれているようでした。そして、同時に「汝の敵を愛しなさい」という言葉が私に迫って来ました。その時の私には、このみことばはとても受け入れがたいもので、何日も悩みました。そして迷った挙句、私をそのプロジェクトから外した人に連絡を取り、直接会い、今後のプロジェクトの成功を祈ることを相手に伝え、握手をし、別れました。主に従わなければ自分はすべてを失うことになってしまうという恐れの中にいました。

話は変わりますが、私の五代前の先祖は、江戸時代（一八〇〇年過ぎ頃）に長崎の外海（そとめ）にある池島というキリシタン集落から、その時代の迫害を逃れ、小さな船で、五島列島にパラダイスを求めて移り住んで来た人たちです。移り住んだ上五島で、彼らは先住民がいる集落から離れた入り江や山あいの非常にへんぴな場所にそれぞれ集落を作り、まるで隔離されたような集落で、ひっそりとした生活を始めたのです。「行く時には極楽と思われた五島が行ってみて地獄」との唄があったように試練が続いたようです。そして仏教徒を装いながら生活した人も多かったようで、恐らく、自分の子孫は人に隠れることなく、堂々と主を前にして祈れることを望んでいたのだろうと思います。そして、その祈りによる計画が今の時代の私に対して突然起こされ、先祖の命をかけた祈りが、時間を超（こ）えて、一時的に信仰から遠ざかっていた私の家系に対し、主の恵みが降り注がれ、信仰の「ともしび」を私に灯されたのではないかと思うのです。

わたしが主である。ほかにはいない。わたしのほかに神はいない。あなたはわたしを知らないが、わたしはあなたに力を帯びさせる。それは、日の上る方からも、西からも、わたしのほかには、だれもいないことを、人々が知るためだ。わたしが主である。ほかにはいない。わたしは光を造り出し、やみを創造し、平和をつくり、わざわいを創造する。わたしは主、これらすべてを造る者。

（イザヤ　45・5〜7）

話を元に戻しますと、これらの主の恵みからイエス様を信じ切る勇気をいただき、新たな信仰へと導かれたように思います。それは自分の思いや考えでなく、主のみこころだけを待つ生活の始まりでした。そしてその数か月後に、この時も唐突にですが、某大学と提携している公的な研究機関から「うちに来ないか」と声をかけられました。この機関は、より学術的・専門的な活動を行うことができる職場であり、さらに会社を倒産させずにすむということもあり、そこに移る決心をしました。家族全員の生活を守り、しかも四人の子供を私立の大学や学校に行かせることができる環境を与えられました。

この団体は、病気が重症化しないように心身の健康づくりに寄与する様々な研究と事業を行っている機関であり、健康増進・臨床研究・先端生命医科学の分野で、全国の多くの大学や医療機関の先生方とのネットワークを持ち活動できる機関です。つまり、これまでとはレベルの異なる高い専門性を持って仕事をできるようになり、発症予防・重症化予防、先端生命医科学的な研究など先駆的な分野での活動を実施できるようになりました。二〇〇一年に、最初の外資系の会社を辞める時には、このような機会を得られるとはまったく考えてもみませんでした。イエス様がどうして私の仕事においてもこのような導きをされるのか、どこに導かれようとされているのかその理由やみこころを探し求めましたが、その答えを見つけることができないまま三年が経ちました。

しかし、徐々に雲行きが変わってきました。上司とはこの機関の将来の事業をどう進めるべきかについて考えの相違が明確になり、意見の衝突が起こり始めました。引き抜かれた私の立場としてはもうこの機関を辞めるしかないと思う状況まで追い込まれました。しかし、そのような状況の中、「イエス様がこの道に進めと示されるまでは自分からは動かない」と強く思わされ、どんな試練を受けても耐えることにしました。何度もこのような試練が続き、その後徐々に、世の中の変化とともに、上司も同じ方向性の考えを持たれるようになり、いつの間にかこの機関の今後の重要戦略に共通の認識を持つことができるようになりました。この団体は、二〇一三年に公的機関と認可され、より公益性の高い事業を行う団体へと変貌している時でもありました。

そして二〇一五年度に入り、私の上司は、私がイエス様を信じているキリスト者であることから、私のことを「私利私欲で動かない非常に信用できる人物」として評価していることを知りました。これは大きな驚きです。その結果、私は、新たな領域での活動機会を与えられ、最初の大きな試練にあった沖縄の時よりもはるかに大きな恵みを与えられ、重要な仕事をリードする役割を担うことになりました。

イエス様は私に、人を見るのではなく、主だけを見上げて信じ、主のみこころを待つことを教えてくださいました。それは、私が想い描く道ではなく、主のみこころによる道であることに気付かされます。振り返りますと、九年前（二〇〇六年）の試練を受けた時も、その後の様々な出来事も私の高慢さを取り除くためであり、信仰に伴う忍耐を与えるためのものであり、イエス様とのつながり方を改めさせる主のみこころによるものであったと信じています。そこには苦しみや試練もありましたが、また今後もそれは続くでしょうが、どんなことであろうと最後には益と

してくださる主の恵みによって戒めと試みを与えられ、弱い自分を気付かされ、主に委ねることを最優先にできるようになりました。私は相変わらず肉の思いによる罪を繰り返すことが多い者ですが、『イエス様の導きだけが信じられる道であり、それ以外のことはまったく頼りないもの・信頼に乏しいものである』という事実を覚えます。そして、イエス様が導いてくださる道だけが、それがどんな道であろうとも結局は真の希望に繋がり、平安を得ることができる唯一の道であることを確信しております。

最後にみことばを一つ。

そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れています。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。（ヘブル　12・5〜7）

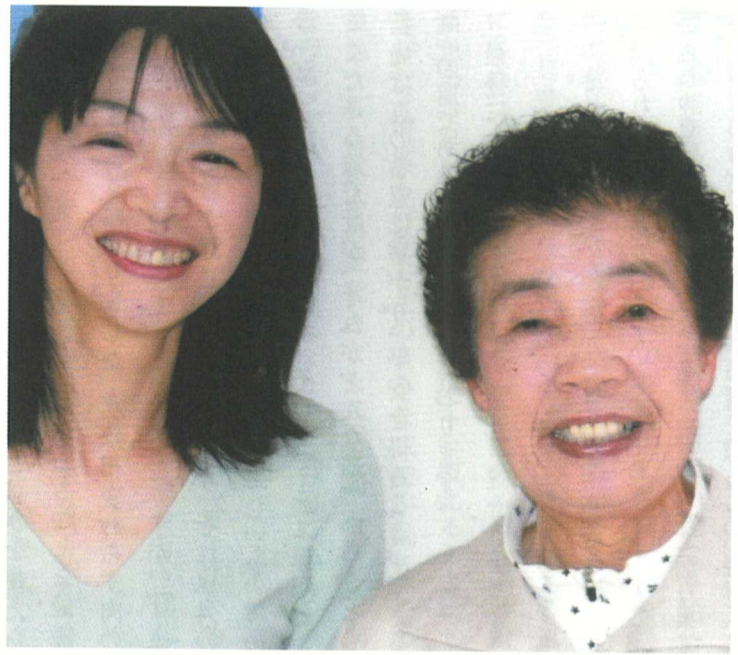
すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。（ヘブル　12・11）

主に感謝です！

浜崎伸夫
長崎県上五島市出身
新上五島町立若松中央小学校・若松中学校　卒
長崎県立上五島高等学校　卒
上智大学　理工学部　卒
現在　公的機関に勤務

感謝します。この恵みに

浜崎　祐子



左が祐子さん、お母さまの松尾稔子さんと

イエス様との出会い

私は両親と妹二人の五人家族の中で育ちました。私の名前の祐という字は「神の助け」という意味があるそうです。しかし両親は、その意味を意識しないでこの名前をつけてくれました。教育熱心できびしくも愛情豊かな環境で育てられました。

聖書の言葉との初めての出会いは、幼稚園の入園前だったと思います。カトリック系の幼稚園の体験入園でもらったみことばカードをなぜかずっと捨てられず、大切に持っていて時折ながめていました。意味はよくわからなかったのですが、「わたしたちは神の同労者である」と書かれていたのを覚えています。

ミッションの中学に入学し、教科書と一緒に聖書が配られました。毎朝、授業の前に礼拝があり、聖書の授業があり、日曜日には教会に行くことが奨励されました。猛勉強して何とかすべりこんだ中学でしたが、私は勉強についていけず落ちこぼれでした。スポーツ系の部活でもぱっとせず、いつも優秀な友人たちと自分とを比べては落ち込む日々でした。そのどうしようもない思いのぶつけどころは両親でした。思春期で反抗期だったとはいえ、両親にはひどい態度をとっていました。「生まれてこなければよかった」、「育て方が悪い」など、ひどい言葉を口走ったりもして両親を困らせたりしました。

そのような私にとって、教会は心の休まる場でした。教会学校の先生がたと話したり、聖書の話を聞くことがとても楽しみでした。「神は愛です。」（1ヨハネ 4・16）。このことばの深い意味はわかりませんでしたが、ありのままを受け入れてくださるイエス様と出会いました。中学三年生のクリスマスに、イエス様を一生の柱として生きて行きたいと決心して滴礼での洗礼を受けました。

しかし、十字架や罪の意味がわかっていなかった私は、教会には行きながらも、この世を愛し、イエス様より人の目を気にする歩みを続けていました。悩みや心の深くにある暗い闇や、みにくい思いを覆（おお）い隠して、どうすれば良い人に見られるか、人から好かれるかということに心を配っていました。それでも隠しおおせない汚いみにくい自分がひょっこり表にでてくるたびに落ち込み、またそれを取り繕い、もっと努力しなければと、もがきつづける日々でした。

結婚

結婚式で与えられたみことばは「あなたがたは、地の塩です。」（マタイ 5・13）でした。そうなりたいと思い、がんばってそのような妻になろうと思いました。しかし現実は違いました。相手を思いやるどころか、「あれもしてくれない、これもしてくれない」と相手に要求ばかりしていました。長男が与えられ、育児の大変さの中で、仕事と自分の趣味に打ち込む主人に対して不満が募（つの）っていくばかりでした。

理想の妻、母親とはかけ離れた姿でした。このわがまま私のためにイエス様が代わりに罰を受けて十字架についてくださったということが少しずつわかり始めてきました。

キリスト集会

私は近所の教会に通っていましたが、あることから教会に不協和音が起こり始め、私は疲れ切っていました。そのようなときに、ママ友であった兵藤幸江さんに出会いました。お互いに、なぜかクリスチャンだとすぐわかりました。幸江さんは青葉台の家庭集会に誘ってくれました。このとき、初めてお会いしたベックさんは私に、「ご主人のこと、どう祈ってるの?」と聞かれました。私は、なぜこのような当たり前のことをベックさんは聞かれるのだろうと思いながら、「どうか早くイエス様を信じて救われるように、と祈っています」と答えました。すると、ベックさんははっきりと「それは間違っているよ。聖書の使徒行伝16章31節に『主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。』と書かれています。家族は救われます、とイエス様がはっきりとお約束してくださっているのだから、救ってください、と祈るのはおかしいよ~。ただ、お約束を感謝していればいいんだよ」とおっしゃいました。びっくりしました。目からうろこが落ちたような気がしました。何かとても暖かいものに包まれたような気持ちになりました。それまで、聖書の言葉をそのまま信じるということを知りませんでした。イエス様のお約束をそのまま感謝していればいいということを知り、涙が止まりませんでした。「ありがとう。ごめんなさい。これからもよろしく」という気持ちが大切なのだということも話していただき、本当にありがたく嬉しく、気持ちが楽になりました。突っ張って、頑張ってきた力がスーッと抜けて行くような気がしました。それまでの自分は、

イエス様がそばにいて手を差し伸べたいと待っていてくださっているのに、その手を取ることもせず、自分の力に頼ってイエス様を悲しませてきたことに気付かされました。「イエス様、ごめんなさい」。教会生活十八年にして、心からイエス様に謝りました。主人にも謝りました。それ以来、私は、キリスト集会に集うようになりました。その後、イエス様は家族をご計画の通りに救いへと導いてくださっています。

洗礼

十五歳のときに滴礼での洗礼を受けたのですが、滴礼には「死んで葬られ、新しく生まれる」という洗礼の本来の意味がないため、まことの洗礼に授かりたいと祈っていました。

その願いが聞かれて、御代田の福音センターで洗礼を受けることになり、主人や子どもたちも来てくれることになりました。感謝の気持ちいっぱいで家をたのですが、道に迷ったことから主人と喧嘩になり、福音センターにたどり着いたときには、主人の機嫌は最悪で、私は自分の愚かさと我の強さに「なんでこうなってしまうのだろう‥」と情けなく惨めなボロボロの状態でした。玄関にベックさんが立っておられ出迎えてくださいました。「ベックさん。私は本当に情けない人間です。こんな私が洗礼なんて受けていいのでしょうか」と事情を話しました。ベックさんは「良かったね~。祐子、ぺちゃんこになれて良かったね~」と喜んでくださったのです。イエス様の愛の大きさを改めて感じました。忘れられない喜びの受洗となりました。

祖母の救い

大好きだった祖母は芦屋に住んでいましたので、子育て中の私はなかなか会いに行くことができず、祈ることしかできませんでした。すぐご近所に村田タ

ヤ子姉がいらっしゃることがわかり、お電話してみると、タヤ子姉は喜んで祖母のために祈ってくださり、親しく訪ねてくださるようになりました。戦後、祖母は神戸の三宮で小さなおぜんざい屋さんを営んでいたのですが、タヤ子姉は、教会での日曜礼拝のあと、よくそこにおぜんざいを食べに行かれたということもわかりました。

阪神大震災の前々日、タヤ子姉のお宅で家庭集会があり、私も祖母とともに集うことができました。そのときに祖母はベックさんからイエス様のお話しを聞き、イエス様を信じ救われました。そのときの祖母の目がキラキラ輝いてとても美しかったことを覚えています。祖母が九十四歳のときのことです。それ以来、一緒にお祈りすると、祖母はいつも小さい声で「ありがとう、ありがとう」と言っていました。「今までいろんな神さんを拝んできたけれど、イエス様は本物や」とも話してくれました。もう少しで百歳というときに、静かに天国に引き上げられていきました。芦屋集会でイエス様を証する葬儀をさせていただきました。

舅(しゅうと)、姑(しゅうとめ)のこと

姑は、独身のときに洗礼を受けていたのですが、舅の生まれ故郷の五島列島に引っ越すときに、クリスチャンであることが知られればそこでは暮らせないと思い、それ以来、信仰を隠し続けていたそうです。東京育ちのモダンガールであった姑にとって離島の村での生活は大変なことでしたが、辛いときには暗誦していたみことば「患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。」(ローマ 5・3〜5)によって支えられていたそうです。姑の口からこのみことばがすらすら出てきたときには驚きました。

また、これも後にわかったことですが、舅の生まれ故郷は隠れキリシタンと縁のある村でした。私は、未信者の主人と結婚したと思っていましたが、主人は迫害から逃れて信仰を守り通した先祖と、戦前にイエス様に出会いずっとみことばに支えられてきた母を持つ、生まれる前から祈られていたイエス様の子どもでした。

舅も姑もイエス様とともに晩年を過ごし、天国に帰りました。二人とも吉祥寺集会でイエス様を中心とした葬儀をさせていただきました。主の憐れみと兄弟姉妹のお祈りに感謝します。

主人のこと

主人はイエス様のもとになかなか来ませんでした。主人はヒューマニストで、「なぜイエス様でなければいけないんだ、色々な神様があっていいじゃないか」と言っていました。子どもたちが成長するにつれて様々な問題が与えられる中で、夫婦の土台が違うこと、夫婦で共に祈れないことはとても辛いことでした。ベックさんから、家族の救いを感謝していればいいんだよ、と本物の信仰を教えていただいたのにもかかわらず、心の底でこの頑固な主人がイエス様を信じることがあるのだろうかと疑ってしまうのでした。平安がなくなればなくなるほど、主人を集会に誘い、本やメッセージをすすめ、兄弟との交わりの場をセッティングするなど、自分で動いてしまいました。主人はいつも「待ってくれよ」と言っていました。私はとうとうギブアップせざるを得ませんでした。みことばが与えられました。

この戦いではあなたがたが戦うのではない。しっかり立って動かずにいよ。あなたがたとともにいる主の救いを見よ。…恐れてはならない。気落ちしてはならない。
(2歴代誌 20・17)

私は、自分で主人に働きかけるのを止めざるを得ませんでした。それから、主人の上にイエス様が働き始められました。試練の中にある主人に一方的に働かれたのです。苦しみの中で主人はイエス様を呼び求め救われました。主人は家族のいない孤独な沖縄のアパートで、イエス様と深く交わりました。イエス様は主人の救いを、ご計画の通りに成就してくださいました。結婚して十五年後のことでした。イエス様は生きておられます。イエス様は本当に素晴らしいお方です。今は毎朝、一緒に聖書を読み、祈り、賛美できることにただただ感謝です。

母の救い

町田鶴川家庭集会でのことです。ベックさんとゆっくり個人的にお話ししませんか、と声をかけていただきました。そのとき母は、大きな悩みの中でうつ状態になりかかっていて、精神科の受診を考えていたのです。イエス様はそのことをご存じで、手を差し伸べてくださいました。母がベックさんに悩みを話すと、ベックさんはにっこり笑って一言「祈ればいいんだよ」とおっしゃいました。その一言で母の表情は変わりました。重荷が取り除かれ、すーっと楽になったそうです。イエス様におまかせすると楽になる体験をして、それ以来、母は変わりました。明るくなったのです。母はこの日が自分の第二の誕生日だと言っています。今は日曜礼拝をとても楽しみにしています。

罪の赦し

多くの恵みをいただきながらも、私は今もなお罪を犯してしまう者です。あるときも、無意識に人の信頼を裏切ることをしてしまいました。イエス様はそのことを見逃さず明るみに出されました。明るみに出されるまで、私は自分のしたことが罪であるとは気付きませんでした。その人との信頼関係はもろくも崩れてしまいました。私には何より悲しいことであり、自分がみじめで情けなく、いつまでも自分を責めていたいと思いました。

聖書を開くと、「あなたがたは罪によって、また肉の割礼がなくて死んだ者であったのに、神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。それは、私たちのすべての罪を赦し、いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。」（コロサイ　2・13～14）とありました。でも、このみことばを素直に受け入れられませんでした。ところが、その後ある姉妹がメールをくれました。その中に「私の債務のためにイエス様が代わりに罰せられてくださって、領収書を受け取ったと言われました。感謝です」とあり、本当にびっくりしました。返済能力はまったくないのに、何とか自分で借金を返そうとあがいていた私にイエス様は二度にわたって、「私が支払ったのだから、もういいんだよ」と言ってくださったのです。そして、驚いたことにその二日後の福音集会でも、このみことばが取り上げられ「私たちに返済能力がないのに、イエス様が連帯保証人になってくださった」と語ってくださいました。

おまけに、その翌日の「日々の光」にもこのみことばがありました。イエス様は再三ならず再四にわたって、「もうあなたの罪は赦されている」と語ってくださったのです。ベックさんが「イエス様は罪を赦したくて赦したくて仕方がない」とおっしゃっていた意味がようやくわかりました。

私は、今もなお自分中心で、人をねたみ、人を愛せない者です。みにくい思いは途絶えることなく私の心の奥からわいてきます。その罪のためにイエス様はののしられ、むち打たれ、想像できない苦しみの十字架の刑を受けてくださったのですから、イエス様の愛

に感謝するばかりです。イエス様の憐れみにより、家族一人ひとりがイエス様に出会うことを感謝して祈っています。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

（エレミヤ　29・11）

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。

（ピリピ　4・6）

彼に信頼する者は、失望させられることがない。

（ローマ　10・11）

浜崎祐子／神戸市出身
西宮市立上ヶ原小学校、神戸女学院中・高等学校、上智大学文学部卒
ＥＣＣジュニア多摩平7丁目教室主宰

主からお受けした無償の恵み

古川　瑞夫



妻の朋子さんと

人生の大半を罪過の中にいた私にイエス様が恵みを与えてくださり、大きな無償の愛によって助けられ、救われました。また病（やまい）を通してイエス様をより身近に感じてきました。こうしたことについて証しします。

私は一九四六年に浅草に近い所で生まれました。実家は町工場を営んでいました。私は三歳から三年間、近所のキリスト教幼稚園に通いました。お昼の食事のとき、三時のおやつのときは皆でイエス様に感謝のお祈りをしたこと、またクリスマスでは金銀の折り紙で作った冠とペラペラな紙のマントで、お星さまを表わした衣装を身に着けてお芝居をした記憶があります。

時が過ぎて学業は順調に進み、社会人となってからは自分の力ですべてができると錯覚して、サタンの誘いのままに放蕩の限りを尽くしていました。経営陣と体制を批判し、リベラルを標榜（ひょうぼう）し

ていました。社会正義のためにと、高ぶる感情のままに労働組合を立ち上げ、仕事と組合活動を同時並行して行いました。自分の行いはすべて正しいと決めつけ、罪の意識は微塵（みじん）もありませんでした。家庭を疎（おろそ）かにして、仕事の延長とか組合活動の延長などと理由をつけて、銀座を始めとして各地の繁華街をさまよい歩き、今になって振り返ると恐ろしいくらいの日常でした。神から見放され、いつ地獄に落ちてもおかしくないほどの状況でした。しかし、当時を振り返ると、どこかでイエス様が見ていてくださったと思います。

私が企画をして立ち上げ進めていた事業が詰めの甘さから失敗し、解散と閉鎖を余儀なくされました。この世を生き抜くことができる強い人間だと自負していたのですが、精神を病み、何をするのか何をしているのかが分からないような、平衡感覚のない極度の心身症になりました。事業失敗の責任から転勤命令が出たときに、退職を決意せざるを得ませんでした。

身も心も疲れ果てズタズタであったときに、イエス様が私を吉祥寺集会へと導いてくださいました。イエス様へ救いを求めたそのときは、ただただイエス様にすがる思いでした。ベック兄とお会いしてイエス様の愛に触れたとき、私の中にある汚れたものが消え去ったように、主にある温かさを身体と心に感じたことは今でもはっきり覚えています。また初めての日曜礼拝のとき、聖歌の清らかさに心が洗われたような、清々（すがすが）しい気持ちになりました。

ちょうど四十歳のときに受洗しました。受洗のあと、最終的に鉄道土木の仕事に就きました。仕事に復帰したあとは、日に日にこの世にとらわれるようになり、仕事に埋没（まいぼつ）しがちな歩みの遅い状態でしたが、イエス様の救いと大きな愛を体験した後でしたので、イエス様を大切にすることは忘れま

せんでした。

鉄道の仕事には公共性があり、仕事は昼夜の区別なく、休日も不定期で、仕事場も全国各地にあり、管理監督のため飛び回っていました。このため毎週の礼拝には行けなかったのですが、仕事の合間を探し、帰省したときに日曜礼拝に行き、折々の御代田キャンプに集う、といった状況が続きました。こんな二十四時間緊張連続の日常が続いていたことと、長年にわたる不摂生が大きな原因で、二〇一〇年に思いがけない大きな病にかかりました。動脈硬化に起因する腹部大動脈瘤です。この病変を動脈破裂による内出血が発症する前に予見できたことは幸いでした。お医者さんからは、症状によっては命の危険がある大変難しい手術になる、と告げられました。私は、なんでこんな病にならなければいけないのかと右往左往し、これからどんなことがあるのだろうと思い悩んでいました。

それでも、入院して手術前検査を続けていた数日間、ベッドの上でイエス様に祈っているうちに生死の不安はなくなりました。手術に向かう手術台の上でも、この後のことはイエス様が支えてくださる、と心から思わされ、動揺はまったくありませんでした。手術は予定の五時間を過ぎても終わらず、さらに二時間を超えて、ようやく終わりました。手術後の集中治療室で、もうろうとした記憶の底にあったときも何の恐れも感じませんでした。イエス様が私をこの世に留まらせるのか、またはもっと素晴らしい所に連れて行ってくださるのか、いずれにしても大きなイエス様の愛のうちにいることを強く感じる時間でした。病気になることもイエス様のご計画のうちにあると思いますが、病気を通してイエス様の素晴らしい愛に触れた体験でした。

そのとき、いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木

10人の証し

Unser HERR lebt

は実をみのらせず、オリーブの木も実りがなく、畑は食物を出さない。羊は囲いから絶え、牛は牛舎にいなくなる。しかし、私は主にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう。私の主、神は、私の力。私の足を雌鹿のようにし、私に高い所を歩ませる。（ハバクク　3・17～19）

この病を通して感じたことは、すぐそばにイエス様がいてくださること、また、すべて私にとって最も良い方向をイエス様が決めてくださるということでした。こんな素晴らしいことを体験させてくださるお方は、イエス様以外にはないと思っています。なんの思い煩いもなく、天国への約束を信じる、この上ない喜びでした。この手術のあとの定期的な検診のおりに心電図検査から異常が見つかり、さらにカテーテルによる手術を受け、薬を多用する状況が続いています。仕事には私に代わるべき人がなく、動脈瘤手術のあと休む間もなく仕事に復帰しました。私は仕事をすることは嫌いではありませんが、本当に弱い人間ですので仕事をするなかで自我と欲が心のうちに大きくなります。これを断ち切るために、イエス様がもう仕事は辞めなさいと命じられて、完全に仕事をリタイアしました。このようにして今では日曜礼拝、学び会に集えることが叶（かな）いました。病にあるときほどイエス様の愛が感じられるときはないと思っています。ただただ天国そのものであるイエス様に感謝するだけです。また、こんな私を罪から解放してくださった主の無償の恵みに感謝しつつ、これからの人生の歩みをして行きたいと思っています。

最近のことですが、長い間疎遠であった兄と、兄の病を通して再会することができました。兄は人生の大半を大変苦労を重ねてきた人でした。また、兄弟以上に親しく、長きにわたり付き合いのあった友人も病となりました。わずかな時間しか残されていない状況で何度も見舞いに行き、イエス様を伝えなければとあせり、でもなかなか伝えきれない自分がいました。そのような中にあっても何とか兄には聖書を渡し、友人にはみことばの小冊子を渡すことができました。もっともっとイエス様の愛を伝えておけば良かった、と今になって思わされています。友人のことは祈り会で兄弟方にもお祈りいただき、両名ともに今は天国にいて安らかに過していると信じています。

だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。（マルコ　11・24）

私の家族には、過去の私と同様に自分の力で生きて行こうとし、どこかでイエス様のことは認めているものの、まだ確かな信仰に至らない者がいます。自分の力では荒れ果てたこの世を生きて行くことはできないことを早く気づき、イエス様へと導かれるよう願っています。この者たちのために、これからも日々イエス様にあって誠実な祈りを続けて行きたいと決意しています。

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。（使徒　4・12）

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜わる慈愛によって明らかにお示しになるためでした。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるのではありません。だれも誇ることのないためです。（エペソ　2・1～9）

古川瑞夫（ふるかわ　みずお）
一九四六年生まれ　慶應義塾大学商学部卒業

滅びの穴から光の中へ

古川　朋子



左が朋子さん、お母さまと

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。（1ペテロ　1・3）

私は、三人姉弟の長女として生まれました。父は国有林を管理する営林署に勤務し、転勤が多かったため転居を繰り返し、小学校二年生の時から東京に住むようになりました。私が大学生になった時、父が山梨県甲府市に赴任したため、東京に残って子どもたち三人で生活するようになり、弟たちの世話をしながら家事の切り盛りをして学生生活を過ごしました。

高校三年生の時に同級生だった主人と卒業後のクラス会で出会い、一九七一年に結婚して長女と長男を授（さず）かりました。主人は商社の営業の仕事で深

夜の帰宅が多く、家族で夕食を共にすることが殆(ほとん)どありませんでした。私は結婚したら幸せになれると期待していたので、想像もしていなかった生活に戸惑い、いらだち、自分の選択は間違っていたと後悔して、しだいに自分自身の人生を有意義に生きるために、夫に頼らず向上心を持って充実した生活をしていこうと考えるようになりました。子供たちが小学生になってからは講習会やサークル活動などに参加して忙しく過ごしましたが、実際は価値観が多様に変わる世の中で、何を土台にして生き、どのように子供たちを育てていけば良いのか分からず、心の空洞は広がるばかりでした。また、人は死んだらどうなるのだろうと漠然とした恐怖心をいつも抱いておりました。劣等感と自尊心が混在し、人に良く思われることに気を遣(つか)い、子供たちには良い子だと思われるようにしつけようとする身勝手な母親だったと思います。

そんなころ、近所に引っ越して来られ親しくお付き合いをするようになった友人から吉祥寺キリスト集会の話を聞き、聖書を貰って未知の世界に触れたような思いがしました。その後、近くで開かれた家庭集会に誘われ、そこで初めて耳にした「初めに、神が天と地を創造した。」(創世記　1・1)というみことばが何故か心の中にすっと入りました。家庭集会の雰囲気は温かく、世の中の価値観にとらわれていない方々のお話しが心に強く残りましたが、集会に行ってみたいという思いには至りませんでした。

半年後の一九八四年四月、埼玉県新座市に転居しました。夏休みに入り、聖書をくれた友人から軽井沢バイブルキャンプに誘われ、子供たちを連れて参加しました。三日間のキャンプで、出会った方々が初対面の私にご自分や家族の中にある悩みや問題を正直に話され、信仰に導かれて喜んでおられる様子にとても驚きました。イエス様を信じた人々は神様の

家族とされ、お互いを兄弟、姉妹と呼び合うことも知りました。ある姉妹から「イエス様を信じたら家事をしている時でも嬉しくなって、いつも喜びに満たされている」と聞いた時、私もその喜びが欲しいと思いました。ベック兄とのお交わりが備えられ、聖書に書かれている神様を信じて生きていこうと決心して一緒にお祈りさせて頂きました。ベック兄に、「私も姉妹方のように喜べるようになれるでしょうか?」とお聞きすると、ベック兄は「朋子は人を見ないで、イエス様だけを見上げていけばいいんだよ」と言われました。

軽井沢から帰宅して、出張から戻ってきた主人にキャンプでの出来事と私の信仰の決心を報告すると、主人は憮然(ぶぜん)とした表情で、「信仰を持つのは自由だけど、自分を誘うのは止めてくれ、聖書の『せ』の字も言わないで」と釘をさされました。

九月に入り、喜びに満たされる生活を期待して礼拝と学び会に集い始め、一九八四年十一月に受洗の恵みに与りました。しかし、心の奥底にしまい込んで忘れていた過去のさまざまな事象が走馬灯(そうまとう)のように脳裏に浮かび、たくさんの罪が示され、自分の醜(みにく)さだけが迫ってきてだんだん苦しくなりました。聖書のみことばが心に入らず、イエス様がどういう方なのか分からず、集会の方々の笑顔がますます眩(まぶ)しく感じられ、どうして自分だけが喜べないのだろうと惨めになるばかりでした。祈り会に導かれ姉妹方の祈りを通して互いのため、家族の救いのために祈ることの大切さを学びましたが、イエス様をまだ遠い存在に感じておりました。しかしある日、突然イエス様は私の心の闇に光を当ててくださり、私の罪のために身代わりとなって十字架の上で死んでくださった事実を示されました。私はイエス様を見上げ「イエス様、ごめんなさい。私の代わりに死んでくださったことを心から感謝します」と

初めて心から祈ることができ、自分の罪の重荷から解放されて心が軽くなりました。

一九八七年、主人は仕事の試練を通してイエス様に助けを求め、救われました。

みことばによって主人との結婚は主なる神様のご計画であったと知り、後悔の思いから解放され重荷を下ろすことができました。私は自分中心に家庭を仕切っておりましたが、家族の頭は夫であり、自分の態度は間違っていたことに気が付かされました。相変わらず我儘（わがまま）で従えない者ですが、イエス様が私たち夫婦の真ん中にいてくださいますから感謝します。

互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。（コロサイ　3・13〜14）

イエス様は両親と弟の上にも救いの御手をさしのべてくださいました。私の両親は退職して静岡県沼津市に住んでおりました。六十歳の時、父は狭心症から脳梗塞を発症し一時危篤状態になりました。八か月の入院を経て快復し身体は不自由になりましたが、母が献身的に介護をしながら落ち着いた生活をとり戻しておりました。そんな両親が一日も早くイエス様と出会って欲しいと祈っていました。ベック兄が、静岡県藤枝市の家庭集会へ行かれる途中二度訪ねてくださって、両親に福音を伝えてくださいました。父は、病後の後遺症でイライラして母に我儘をぶつけることがよくありましたが、ベック兄とお会いしてから穏やかになったように思います。ベック兄が帰られた後、母が「お父さん、本当に神様はいるのかしら?」と問いかけたら「俺は神様を信じる」とはっき

り言ったそうです。

父は一九九六年九月末、七十九歳で亡くなる前日まで自宅で母と共に静かで平和な生活を送ることができました。父の具合が急に悪くなり病院へ運ばれ、快復の兆（きざ）しが見えて医師からも大丈夫と言われ母と弟は安堵（あんど）して帰宅しましたが、明け方静かに息を引き取ったそうです。父はたった一人でどんなに心細かっただろうと思い、心が痛みました。しかし、入院したと連絡を受けた晩、「イエス様、父は一人きりで病室にいますから、どうか父と共にいてください」と祈ったことを思い出し、イエス様が祈りを聞いてくださって父の傍におられ天の御国へ引き上げてくださったことを確信しました。しばらくして母から「亡くなる半年くらい前にお父さんが、もし死ぬとき苦しかったらもう一度ベックさんに来てもらいたいと話していた」と聞き、父がイエス様の救いをいただき、肉体の苦しみもなく平安のうちに召していただいたことを覚えて心から感謝しました。

二〇一二年三月に長男である一歳下の弟が膵（すい）臓癌で亡くなりました。人生の終止符を突き付けられた弟の心の内は不安と悔しさで一杯だったと思いますが、みことばのカードや小冊子を渡しても頑（かたく）なに拒み、冷静に仕事や身辺の整理をしながら、次々に起こる痛みや不調に耐えていました。私は弟に何も伝えることができず、弟の魂の救いを必死に祈りました。亡くなる二週間前にベック兄が病室まで来てくださいました。弟は痛み止めの投薬でもうろうとしていましたが、ベック兄を見てニコッと笑い起き上がりました。ベック兄が、「病気は面白くないけど、病気になったのは神様の罰ではない。神様は人間に罰を与える方ではなく愛してくださっているんだよ。何故、どうして?と考えて後ろを振り向く必要はない。これからのことも全部神様にお任せして前を向いていけばいいよ」と言ってくださった時、弟は

パッと目を輝かせて「うん、そうだね」と答えました。イエス様の十字架の贖いによって永遠の命をいただいている私たちの国籍は天国にあることについて語ってくださった後、「大切なことは、①イエス様ごめんなさい。今まで我儘でした。②イエス様ありがとう。③イエス様これからもよろしく。これだけだよ」と言われた時、弟がペンを持つ仕草をしながら「メモして」と言ったので私たちは嬉しくなりました

母は認知症が進んで、次男の弟夫妻の世話を受けながら穏やかな日々を暮しております。認知症によって最愛の息子に先立たれた悲しみを和らげていただけたことは本当に感謝でした。それでも弟の遺影を目の前において時折寂(さび)しそうにしておりましたので、「お母さん、今は寂しいけどまた天国で会えるのよ」と言いますと、「天国なんてないわよ。人間は死んだら無になるのよ」ときっぱりと言ったので仰天しました。

ある時二人で食事をする前に小冊子のみことばを読み、「愛する主イエス様、私たちのわがままのために、代わりに罰せられ死なれたことを感謝いたします…」とお祈りの言葉を読んだ時、じっと耳を傾けて聞いていた母が「何故(イエス様は)死んだの?」と聞いたので、「イエス様は私たちの我儘の罪のために身代わりとなって十字架に架かって死んでくださったのよ。だから私たちは罪が赦されて天国に行けるの」と答えますと、「私も天国に行きたい」と言いました。「イエス様に感謝していれば大丈夫よ」と言うと、「あゝ良かった。ありがたいわねえ」と嬉しそうに言いました。認知症が進んだ母の心の奥にイエス様が働いてくださっていることを知り心から感謝しました。

二〇一五年、母は九十一歳になりました。十月に静岡喜びの集いが父母の故郷である天城で開かれ、短い時間でしたが弟夫妻が母を連れて来てくれて、ベック兄と集会の兄弟姉妹に歓迎して頂きとても嬉し

そうでした。その時家族で撮っていただいた写真を気に入って毎日のように手にして眺めています。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。(使徒 16・31)

何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るのです。(1ヨハネ 5・14〜15)

イエス様は、暗闇の中でさまよっていた私を光の中へ導きいれてくださいました。もしイエス様を知らなかったら、世の中の価値観に振り回され、自分の思いを通そうと我を張り、不満ばかり抱いて周りを責め続けていたと思います。

二十六〜七年前、主イエス様の導きによって新座に祈り会が起こされ、姉妹方と共に心を一つにして家族や友人、知人の救いのために祈り合い、交わりの喜びをいただいています。主が共にいてくださる平安と希望が与えられている恵みに感謝して、主のご再臨を待ち望みつつ歩ませていただきたいと願っています。

もしあなたのみおしえが私の喜びでなかったら、私は自分の悩みの中で滅んでいたでしょう。(詩篇 119・92)

主は情け深く、あわれみ深く、怒るのにおそく、恵みに富んでおられます。主はすべてのものにいつくしみ深く、そのあわれみは、造られたすべてのものの上にあります。主よ。あなたの造られたすべてのものは、あなたに感謝し、あなたの聖徒はあなたをほめたたえます。(詩篇 145・8〜10)

10人の証し

Unser HERR lebt

こうして、主は彼らの救い主になられた。彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。

（イザヤ　63・8〜9）

古川朋子（ふるかわともこ）
一九四六年静岡県伊豆市天城湯ヶ島町生まれ。
東京都江東区立深川毛利小学校、深川第七中学校、
東京都立小松川高等学校、立教大学文学部卒業

求めていた真理は聖書によって見出しました

新妻　和子



右から和子さん、長男の秀之さん、夫の美之さん、長女の由美子さん

私は、一九四二年（昭和十七年）、福島県の草野村（現在のいわき市）に、農家で五人兄弟の三女として生まれました。育った環境は、自然豊かな農村で、親戚、隣近所すべてが先祖崇拝・仏教を重んじており、そのような中で何の違和感もなく過ごしていました。一九六九年（昭和四十四年）、日立製作所に勤めていた四歳年上の主人美之と知人を通してお見合いをし、結婚に導かれて、日立市に住むようになりました。主人も同じ草野村の出身で、代々続いた農家の五人兄弟の次男として生まれ、神・仏の祭り事に熱心で、イエス様とは無縁な環境で育ちました。

一九七〇年（昭和四十五年）に長女、一九七四年（昭和四十九年）に長男と、二人の子どもを与えられました。ちょうど、長女が小学校に入学したころから、高度成長期で主人の仕事が忙しくなり、国内外に出張することも多くなりました。私は主人不在の生活の中で、子育てと学校や団地内の行事などで価値

観の違う人たちとお付き合いするうちに、人間関係で悩むようになり、不安、孤独、恐怖の毎日でした。そのような状況の中で私は、正しい人、善い人、何ものにも動かされないもの、何かしっかりとしたよりどころとなるもの、良い母親とは、と真理を求めていろいろな書物を読んでいました。そんなとき、「実践倫理宏正会」（朝起き会とも言っています）で真理を学んでみませんか、と友人から誘われたのです。

「実践倫理」の主旨は、人間は宇宙大自然の中に生かされており、倫理の中に生かされている人間が倫理に順応していく道は実践以外にないというもので、一にも実践、二にも実践です。実践を貫いていけば、私たちの前途に人間の生活の道が開かれるというのです。そのために、日の出とともに起き、今日一日を力いっぱい正しい倫理にそって生きることを大自然に誓うのです。具体的には、毎朝五時三十分に会場に集い、六時まで三十分の間に五つの誓いを唱えて会長の倫話を聞き、一日のスタートを切る、という行いをする会でした。五つの誓いとは、

今日一日、三つの恩を忘れず喜んで進んで働きます。

三つの恩とは、①宇宙大自然に生かされていること、②先祖、両親に対する恩、③お世話になった人の恩

今日一日、人の悪を言わず、己の善を語りません。

今日一日、気づいたことは、身がるにすぐ行ないます。

今日一日、腹を立てず、不足の思いをいたしません。

今日一日、三つの無駄を排し、新しく大地に生きぬきます。三つの無駄とは、①時間の無駄、②心の無駄、③物の無駄

私は、徳を積み、修業して正しい人間になることがあたりまえと思っていましたし、また努力して実践する朝起き会は宗教的でもなさそうでしたので、主人の賛成もあって友人と共に朝起き会に入会しました。

朝起き会に集い五年目に入ったころから、頑張（がんば）れば頑張るほど、外面的には穏やかにふるまっていましたが、私の中に人を裁く心、冷たいみにくい心が示され、自己嫌悪、不安がおそってくるようになりました。

このような時期に、会場が突然日立市から東海村に移り、時間的に参加が困難になり、朝起き会を止めざるをえなくなりました。その後も、生長の家の家庭集会での母親教室、また心理学やカウンセリングの学び会に集って真理を求め続けていました。

このようなとき、千葉県柏市の単立の教会の牧師さんが石塚姉妹の自宅で家庭集会を開いており、一緒に聖書を学んでみませんかと誘っていただきました。聖書を学ぶ会ならと気楽な気持ちで友人と共に集わせていただきました。初めて聖書のみことばにふれて、新鮮さと驚きがありました。特に衝撃だったのは次のみことばです。

義人はいない。ひとりもいない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもいない。（ローマ　3・10〜12）

人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。（マルコ　7・20〜23）

人間はすべて罪人であり、実際の行為だけではなく、それを心に抱くことも罪であるとのこと。このみことばは正しい善い人間になるためにたえず正しさを求め、努力し、実践し、そのようにして真理を求め続けた私にとっては大変ショックなことでした。しかし、人間を創造された神様は、自我と欲望のかたま

りとなって滅びの世界へと向かっている人間をあわれんでくださり、愛してくださったこと。イエス様の十字架の死によって私の罪をすべてあがなってくださったこと。罪を悔い改めれば赦されるばかりか、イエス・キリストの復活を通して「永遠のいのち」が与えられ、新しく生まれ変わること。新しく生まれ変わる自分は、永遠にイエス・キリストと共に生きる、というのです。これらのみことばにふれたとき、イエス様を十字架の上に死なせた罪人をここまで愛してくださるイエス様の愛の深さに感謝せずにはいられませんでした。

そして、このみことばに出会った直後に、次のみことばが与えられました。

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。（ヨハネ　14・6）

わたしは、あなたがたに悟りを与え、行くべき道を教えよう。わたしはあなたがたに目を留めて、助言を与えよう。（詩篇　32・8）

これらのみことばが与えられ、私が求めていた真理は聖書にあると確信することができ、聖書のこと、イエス様のことに深くふれてみたいとの思いが強くなり、一九八九年（平成元年）、石塚姉妹の自宅で受洗させていただきました。

受洗後、みことばが心の深いところまでしみ込み、喜びの中におりました時期に家庭集会が中止になり、毎週土曜日に柏市の教会に集うことになりました。しかし、いろいろなことがあり、結果として教会を離れました。

家庭集会を通して聖書に出会い、イエス様に出会うことができ、また聖書のこと、イエス様のことを身近で話し合える姉妹方に出会えたことは本当に感謝でした。教会を離れてからも、家で聖書を読みつつ、いろいろな牧師のテープや小冊子などでみことばにふれておりました。しかし、心の中は孤独で不安でした。そんなとき、石塚姉妹より、牧師制度がなく、組織も会則も会員制度、献金制度もない吉祥寺キリスト集会のベック兄と兄弟姉妹が大洗に来られるとお聞きし、そこへ伺わせていただきました。

ベック兄とのお交わりで、ベック兄は、「宗教と信仰は違います。両者はまったく異なるものです。そして、人間にとって真に必要なことは、宗教に入ることではなく、信仰を持つことです」とおっしゃって、宗教と信仰との違い、救いについてわかりやすくていねいに説明していただきました。

また、「生きて働かれる御霊が信じる者のうちに住んでくださいます。ですから、私たちを導いてくださって、どんなに努力しても律法を守り行うことができない私たちが実を結ぶことができるように、導いてくださっているのです。自分で自分を変えようとする思いは、ごうまん、自己中心の罪なのです」と、みことばを通してお話しをしてくださいました。人間は努力し実践するべきであるという考えだった私は、いかにごうまん、自己中心の者であったかを気づかせていただき、本当に感謝でした。このお交わりを通して、朝起き会、カウンセリングの勉強会、母親教室の学び会で知識はたくさん学べても、なぜか自己嫌悪におちいり、平安がなかったこと、教会生活で悩んだこと、また一人で聖書を読み、テープを聞いてみことばにふれていても、孤独で不安だったこと、こうしたことのすべての原因は私のごうまん、自己中心の罪とまちがった信仰からきたものであったとわからせていただきました。

この大洗でのお交わりの直後に、日立の地に日立キリスト集会が開かれ、私も日立キリスト集会に集わせていただく恵みにあずかることになりました。

あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。（ヨハネ　15・16）

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。（詩篇　119・71～72）

真理を求め続けていた私にとっては、集会に導かれるまでは理解に苦しむことばかりがありました。しかし、イエス様ご自身が私を選んでくださり、私に苦しみを通していろいろ体験し、納得させ、最善の救いの計画をもって、日立キリスト集会に導いてくださったことを心から感謝しています。

純粋に聖書のみことばだけが中心の日立キリスト集会に導かれて二十五年になります。今でも、私の生まれ持った性格のごうまんと自己中心で、ことあるごとに必要以上に心配し、思いわずらう愚か者ですが、日々、イエス様に自分の罪を悔いあらため、聖書のみことばに信頼して祈り求め、おゆだねし、神様がたとえそれが良いことであろうと悪いことであろうと、すべてのことを益として、最善へと導いてくださり、私たちの上に起こるすべての事柄は、天の父の愛のみ手に赦されたものであると信ずる信仰へと少しずつ導いてくださっています。イエス様の愛に感謝しております。

また、どんなことでも自由に話し合える主にある兄弟姉妹たちとの楽しいお交わりの中で、心の平安をいただいていることも本当に感謝です。かつて、自分一人で努力し、頑張って歩んだ道は、「不安、恐怖と

孤独」の道でした。私のこれから歩む道にもいろいろな試練はあるかと思いますが、神様のみこころを探り求めながら、一人ではなく、イエス様と共に感謝をもって歩んでまいりたいと思っています。

新妻和子（にいつま かずこ）
一九四二年　福島県出身
福島県立磐城女子高等学校卒業
夫／美之（よしゆき）
長女／由美子（ゆみこ）、長女の夫／中島一則（なかじま かずのり）
長男／秀之（ひでゆき）

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝・福音集会

	10:00 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00



西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話] 0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15　〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話] 0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33　〒389−0201

■ しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。



モーセの十戒　神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと―ヨハネの黙示録（第1～4巻）

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ　―私たちは主のもの証しシリーズ（第1～9集）

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。



実を結ぶ命　がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ31・3）リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ（上・下巻）

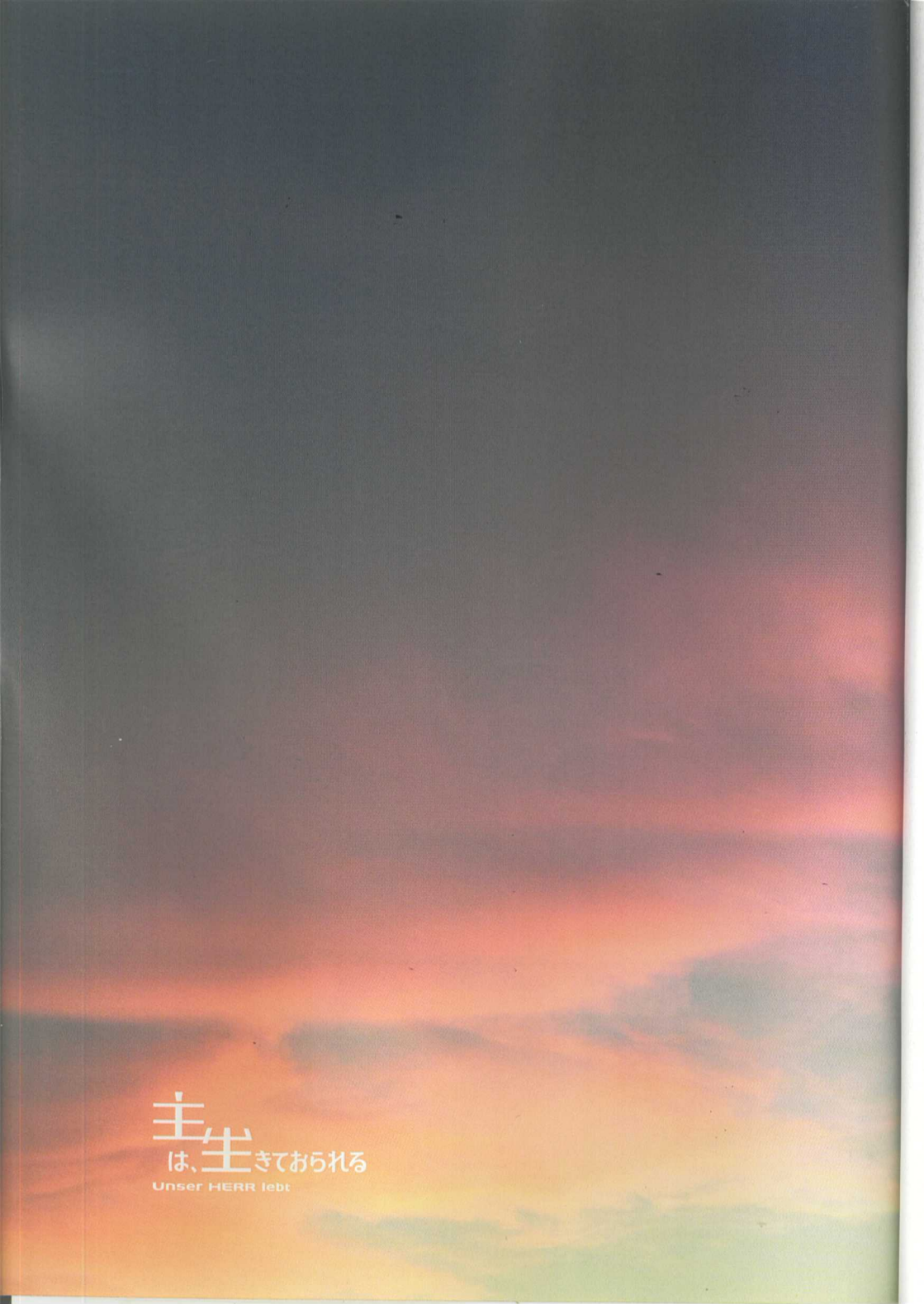
ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180－0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4－9－11　吉祥寺キリスト集会

集会の出版物



Unser HERR lebt
主は、生きておられる

主は生きておられる　第42号

定価100円（税込み）2016年10月15日初版

編集長	ゴットホルド・ベック
編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。